

京都の福祉

発行 京都府社会福祉協議会



本紙は、共同募金の
配分金によってつくられています。

2009
8
No.492



主な記事

- 1面…もえくさ
- 2・3・4面…シリーズ②「いのち」について考える
- 5面…きばってます(久御山町社協、木津川市社協、府社協)
- 6面…つながろう うみだそう 企業と福祉 京都から
福祉史跡・事跡をめぐる旅
- 7面…京都ジョブパーク「福祉人材カフェ」開設
- 8面…夢中! 熱中!! ふくしびと

高齢者見守り隊と社会福祉体験学習のコラボレーション (木津川市社協)

もえくさ

つれづれなるままに。生活保護の利用世帯は今年の3月で、119万世帯、165万人に達し、さらに増え続けることが予想されている。中でも、失業などで65歳未満の世帯が全体の約1割を占め、この層が急激に伸びてきているという。昨年末から年始にかけての「年越し派遣村」での取り組みが、厚労省を動かし、住所が不定でも働ける人でも実態に応じた対応が可能となったことも要因であろう。しかし、一定の前進や改善があったとしても全国を見渡せば、餓死事件や不当な扱いをされている

人たちはまだまだ後を絶たない現状があることも事実である。今なおワーキングプアの人口は、失業率の急激な上昇を背景に拡大の一途である。憲法25条に基づく暮らしの保障と確保は常に新しい課題と要素をもって不断に取組まないと、と改めて思う日々である。さて、このほど、「生活保護問題対策全国会議」は、ケースワーカーの増員と生活保護費の国庫負担増額を要望する宣言を採択した。要であるケースワーカーが不足しているのは利用者の支援ができないばかりか、制度本来の役割をも果しえない。国としても、この要望を正面から受け止めてぜひ前進的な見直しを図っていただきたいものである。しかし、近年、財政問題を主な理由として、自治体職員の定数削減が全国いたるところで行われている。増やすどころか逆に職員の削減によって住民の暮らしや福祉サービスに影響を与えたら、本来の自治体の役割は何だろうと考えてしまう。過日行った市町村社協の事務局長会議で、「最近では、ケースワーク(生活保護行政)の下に、権利擁護事業(日常生活自立支援事業)が位置づけられている」とある事務局長さんが嘆いておられた。最後の皆、セーフティネットである生活保護行政が、「うちでは手一杯」ということなのであるか。こうした思いを抱いている事務局長さんは、残念ながら少なくない。今、全国の府県社協でも市町村社協でも、「仕事は増えるが人は減らされる一方で、青息吐息」の状態であるという。そんな中、この大不況下にあつて、生活福祉資金の大幅な見直しを検討され、この10月から実施の運びとなった。国民にとっては大いなる改善である。かなりの貸付件数(業務量)が予想される中で、実施主体となる都道府県社協や協働・連携して取組む市町村社協などへの人的、財政的配慮が行われ、改正趣旨を踏まえた、「生きた制度」として運営できるよう切に願うものである。

介護のいまとこれからを探る

～遠く離れた家族を介護する～

前号では、急増する介護疲れ・介護倒れの問題から、制度の狭間で孤立する介護者の問題を取り上げました。京都府内でも高齢化は急速に進み、介護期間の長期化や介護する家族の高齢化など、家庭での介護形態も多様になってきています。介護をする人、される人の双方が高齢者である「老老介護」、認知症の人が認知症の家族を介護する「認認介護」といった状況や、男性の介護者の増加、離れて生活する家族を介護する「遠距離介護」など介護保険制度の狭間で家族による介護の負担が増大してきています。今号では、特に「遠距離介護」にクローズアップし、実際のケースも踏まえながら介護を支えるつながりについて考えていきます。

〓府社協にかかってくる電話相談より〓

本会の代表電話には、様々な電話がかかってくる。そのなかでも「高齢者介護の相談」が多く、とりわけ「遠距離介護」に関するものが目立つようになってきました。電話の向こうの声は、「どこへ相談したらいいかわからない。」「もうどうにもならない。誰かに聞いて欲しい。」「と切実です。

相談 1



- 相談者：他府県に住む女性
- 内容：京都の故郷に一人で暮らす母親の生活が心配
- たまに帰郷すると見たことのない物が増え、様子がおかしい。身近に様子を見守ったり変化に気付いたりしてくれる誰かがいて欲しいが、地域の人には遠慮もありお願いしづらい。日頃の暮らしに不安が多くなる中で、母親の将来を案じている。

相談 2



- 相談者：京都に住む女性
- 内容：故郷（他府県）住む両親について
- 母親が体調を崩し父親が介護をする「老老介護」の状態だったが、最近父親も外に出なくなり認知症が進行している。月に1回は帰っているが2人とも家事が出来ない様子で家が散らかっており驚いた。

にお話をうかがいました。

●退社後、電車に飛び乗る日々

Kさんの父親が脳卒中で倒れたのは、約30年前59歳の時。その時はほとんど後遺症もなく元気になったが、10年後に2度目の発作で倒れてからは介護が必要になり、母親による在宅介護が始まりました。

脳卒中の後遺症で歩行が困難になり、トイレや入浴に介助が必要になりました。ホームヘルパーは週3回利用していましたが、本人が家族以外の介助を好まなかったため、ホームヘルパーと家族で回数や分担を決めて介助を行っていました。「当時、体重約70kgの父親を40kgにも満たない母親が介護をすることは非常に大変でしたね。」とKさん。

Kさんと弟は、「まめで几帳面な母親が介護で倒れてしまわないように。」と、京都から週1回ずつ岐阜へ通い介護を分担。仕事をしながら実家を行き来する日々が89歳で亡くなるまでの約20年続きました。

職場のある京都から実家のある岐阜へは約3時間。「電車で行く場合は、17時15分に退社後、18時のJRに飛び乗り、20時に実家へ着く。入浴やトイレの介助をして、

朝6時の始発で京都へ向かい、8時30分に会社へ出る、という生活だった。容態が悪くなった時などは、夜中に車で高速を走り向かったこともありますよ。」とKさんは振り返ります。

〓遠距離介護の実際〓

では、実際に介護をしている人はどんな

思いなのか。京都から岐阜県へ父親の介護を続けた経験を持つKさん（60才代、男性）

このような相談は、すでに専門職や医療機関が関わっているケースもありませんが、本会が行う権利擁護事業や介護サービスの情報公表等の紹介、他の相談機関や行政、市区町村社協などにつなぐといった対応をとっています。

また、他府県に住む方や他府県へ移る方、最寄りの相談先が分からない

シリーズ② 「いのち」について考える

●「これ食べて。」
さりげない手助けが支えに

3度目の発作から入退院を繰り返していた頃、このままでは皆が疲れ果ててしまうと感じたKさんは両親と一緒に暮らすようと提案しました。両親の納得を得て、京都の自宅をバリアフリー住宅に新築。しかし、完成していざ引っ越しという段階になってから母親が「京都に行くのは嫌だ。」と言い、最終的には岐阜で暮らし続けることを選びました。母親が引っ越さなかったのは、「生

るといいます。

例えば、Kさんの父親が発作で倒れた時、近所の人が京都の息子たちへ第一報をくれたり、家から病院へ必要な衣服等を持って来てくれたりということがありました。ご近所に息子の緊急連絡先を伝え、鍵を預けていたのです。また、毎日の病院通いで大変だった時、「これ食べて。」とおかずを持ってきてくれることも度々あったといいます。このようなさりげない手助けは、二人暮らしだったKさんの両親にとって物心両面での大きな支えでした。

まれ故郷でもある地元では姉妹や友人、ご近所とのつながりと支えがあるから。」

Kさんは、「遠距離介護をする私も介護を行うメンバーの一人です。毎日の介護のうち私は週1回しか帰れない、という思いでした。」と言います。

「ご近所にはとても助けられた。」とKさんも語ります。両親の住む実家は同時期に入居した32戸からなる集合住宅。そのためご近所のつながりが非常に強く、みんなが顔を知っているし、気兼ねなく助け合いもできてい

●介護を支えた「誰かの存在」

その介護を支えたものは何だったのでしょうか。Kさんからは、「同じ家族という思い。」という答えが返ってきました。「介護だから」という思いではなく、家族生活の一部としてやってきたんです。」と。そこにはかけがえのない家族の時間があります。「私が帰った時は、喫茶店で語り合うことが父親の楽しみだったんです。2人で、家のルーツや母親との馴



るという思いです。近所の人が京都の息子たちへ第一報をくれたり、家から病院へ必要な衣服等を持って来てくれたりということがありました。ご近所に息子の緊急連絡先を伝え、鍵を預けていたのです。また、毎日の病院通いで大変だった時、「これ食べて。」とおかずを持ってきてくれることも度々あったといいます。このようなさりげない手助けは、二人暮らしだったKさんの両親にとって物心両面での大きな支えでした。

京都府北部で活躍されているケアマネジャーさんに遠距離介護をされている方に向けてメッセージを頂きました。

遠距離介護の経験者の方に長く続けられる姿勢が求められるでしょう。主介されるための条件をお伺いしますと、「経 護者を支える家族のあり方が重要です。 協力」と「家族の理解と後方支援」と さらに、訪問販売をしてくれる八百屋 即答で返ってきました。

地域の力をフル活用

～ケアマネジャーからのメッセージ～

さん、魚屋さん、パン屋さんの手配等、地域の力をフル活用し高齢者の暮らしを支えてもらうこととなります。まさしく「地域力」です。先々、遠距離介護が予想されるならば、早い段階から地域で利用できる資源の発掘、いざという時に安心して相談できる機関のめぼしづけ、をしておかれるといいでしょう。

居宅介護支援事業所選定のポイントについて、ある遠距離介護されている方は「ケアマネジャーの力量とその関係」「人脈と識見」とおっしゃいます。ケアマネジャーが持つネットワークの広さが求められているのです。

「私が出費！」になります。また、サービスが一定量確保でき、ご本人の状態が安定してくるといったん、自分の住まいにも帰らなければなりません。その際に、隣近所、親戚に安否確認やごみだしの声かけを頼むとここにも何もなしというわけに行かない。また、兄弟姉妹がいれば、主介護者に対してサポートを

介護に役立つ情報

■【航空料金等の介護割引】

Kさんの例でも、離れた距離を移動することは体力的にも経済的にも負担は大きいようです。そういったニーズに合わせて、各航空会社では、離れて暮らす介護者への運賃の介護割引を実施しています。介護保険で要支援、要介護の介護者（二親等までの親族）が航空機を利用する場合に割引運賃が適用されています。（詳細は、各航空会社にご確認ください。）

■【介護・福祉サービス第三者評価】

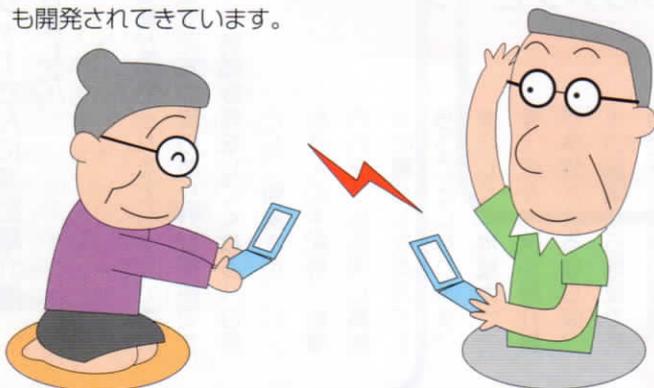
介護・福祉の分野において、「事業所は自ら提供するサービスの質の評価を行い、質の向上に努めること」「利用者の選択に資する」等を目的として、介護・福祉サービス第三者評価を行っています。詳しくは、京都介護・福祉サービス第三者評価等支援機構のホームページをご覧ください。 <http://www.kyoto-hyoka.net>

■【介護サービス情報の公表制度】

平成18年4月1日の介護保険法改正により、介護サービス情報公表制度が開始されました。この制度は、利用者が事業所や施設を比較・検討し、適切に選ぶための情報を提供するしくみです。詳しくは、京都府指定情報公表センターのホームページをご覧ください。 <http://kohyo.kyoshakyo.or.jp/kaigosip/Top.do>

■【コミュニケーションツールなど】

遠く離れて暮らしていると、電話は重要な連絡ツールです。Kさんの例でも、緊急連絡先を伝えておくことで、いざというとき迅速に対応できるというような話がありました。最近では、携帯のメールをコミュニケーションツールとして役立てている例もあります。離れた家族を自宅にいながら見守ることのできる電化製品や、火を使わない調理器具など日常生活を安心して維持していくための道具も開発されてきています。



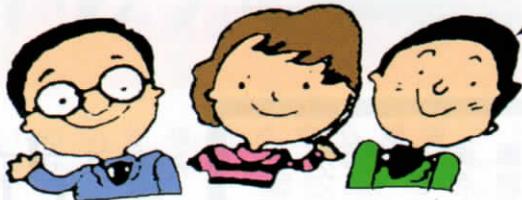
れ初めなどの昔話をし、ゆったりと時間が流れました。父親がどんな人生を歩んできたかなんて、それまで知らなかったなあ。」
「介護はゴールが見えず、本人の状態は完全に元には戻らないし、先が見えないことが一番辛かったですね。」とKさん。その中で、母親と弟と三人で気持ちをかち合っ

か「の存在」はとても重要。」
父親のお葬式の時、母親は、「精一杯頑張った。悔いはない。周りの人にもたくさん助けてもらった。」と話したといいます。
●介護者のケアができる体制を
これまでの介護を振り返って、もっと必要なことは何か、Kさんにお聞きしました。「一番の思いは、母親をどう守るか、でし

たね。介護者をきちっとケアできる体制が必要だし、そうでないと続かない。また、
●つながりが支えに
介護を支えることは何か、今回の取材では、介護者を一人ぼっちにさせない、家族や地域の人など「誰かの存在」の重要性が

病院や福祉の専門機関によってまだまだケアに差があると思います。特徴があることは大事だけでも、ケアの評価や基準をしっかりと設け、どこに行っても一定の水準以上のケアを受けられるようになって欲しいですね。」といいます。
見えてきました。さらに、専門職や制度が「その人らしい介護をどう支えるのか」という視点を持って、サービスを向上し支援しなければいけないことを改めて認識しました。
多様化する生活の中で、介護の課題もさまざまです。一人一人の困りごとから共通のニーズを探り出し、思いにあった生活のための支えやつながりをどのようにしていくか。最終号では、その人らしい暮らしと介護を支えるしくみについて考えていきたいと思えます。

きばってます!



～市町村社会福祉協議会の活動紹介～

高齢者見守り隊事業

高齢者見守り隊事業とは…

「いつまでも住み慣れた地域や家で安心して暮らしたい」という高齢者の願いを支えるため、京都府内の全25市町村社会福祉協議会では、京都府の補助を受け「高齢者見守り隊事業」に取り組んでいます。

「きばってます」は、市町村社協のがんばっている取り組みを発信したい!と、いう思いから生まれたコーナーです。今回は、「見守り隊事業」を取り上げる3回目。前の2回は見守り隊事業の市町村の取り組みを横断的に取り上げてきましたが、今回は、「活動を知らせる・広げるための取り組み」を紹介いたします。

住民と専門職の協働による「地域見守りネットワークのパンフレット」づくり

久御山町
社会福祉協議会



福祉のふくちゃん

高齢者見守り隊事業を実施して、1年目は、住民の皆さんにこの事業を知らせることが大切との思いから、毎年行っている地域福祉活動研修会に参加された方々に呼びかけ、パンフレットづくりについての、協力要請を行いました。

多数協力しますとのお返事をいただきその中から6名の方にご依頼いたしました。

8月～12月まで5回

にわたり夜間2時間ほど集まっていたいただき色々なご意見をお聞きました。「誰にでも渡せるもの」、「地域見守りネットワークの理解が得られるもの」、「パンフレットを見て行動を起こせるもの」、「普段の生活の中で気軽に出ることが分かるもの」や、イラストを沢山入れるとか、ネーミングやキャラクターも作ればどうか等々のご意見をいただき、完成することができました。

掲載内容やネーミング、キャラクターも皆で決めました。キャラクターは「ふくろう」に決まり、愛称を「ふくろう隊員」にして、隊員を募集しようということになりました。また見守り活動をしていることが分かるように、身分を証明するカードにもふくろうのキャラクターを入れ、作成しました。

木津川市
社会福祉協議会

わかりやすく伝える「見守り隊の活動の手引き」を作成!

見守り隊の
お元気サポーター
活動の手引き



社会福祉法人
木津川市社会福祉協議会

木津川市社協では、「高齢者見守り隊事業」は合併前からすすめている事業のため、それぞれ特徴を持っている旧町間の取り組みや認識に違いがあり、1つにする事の難しさを感じていました。そこで、活動内容をわかりやすく説明し、活動のねらいがわかるものをと手引きを作成しました。

まず、わかりやすく見やすくするために明るい色使いのカラー印刷にし、図を使うなど工夫しました。それから、活動内容が難しいものではないと思っていただけるように、文面を考えました。あくまでも日常のゆるやかな、温かい見守りをしていただき、困ったときは社協がサポートするという安心感を持って活動に参加し続けていただけるものを目指しました。この手引きによって、一人でも多くの住民の方々が気軽に見守り隊に参加し、協力していただくことが出来ればと願っています。

見守り活動の「あったかさ」「やさしさ」を伝えたい!DVDを作成

京都府社会
福祉協議会

京都府社協では、この度、見守り活動の「あったかさ」「やさしさ」を伝え、広げたいことを目的に、DVD「お元気ですか?～広げよう!暮らしの安心・地域のつながり～」を作成いたしました。

今回は、京都府内での取り組みの積み重ねから、5つの実践場面(「配食を通じた見守り」「声の訪問」「集いの場」「暮らしのサポート」「企業と連携した見守り」)を紹介しています。また、活動しているリーダーや高齢者の方々、社会福祉協議会職員のインタビューを通じ、見守りの意味や活動のやりがい、喜びなど、そして、活動を広げ支える社会福祉協議会として、何ができるのか、どんな願いや思いですすめているのか、について伝える内容となっています。

地域において見守り活動の大切さを伝える場面や、取り組みを呼びかけていく場面などでご覧いただき、支えあいの取り組みが広がり、優しさや心のふれあいの中で地域のつながりが高まることを願っています。

お問合わせ、貸出希望は下記まで。

【お問合せ先】京都府社会福祉協議会
地域福祉・ボランティア振興課
TEL:075-252-6294



古都・京都の福祉史跡・事跡をめぐる旅

民生児童委員、福祉委員、福祉施設役職員、社協役職員の視察旅行に最適！

歴史ある神社仏閣や世界文化遺産など、魅力ある観光スポットを有する京都には、先人たちの偉業をあらわす福祉史跡や事跡が多く残されています。そして、その先駆的な精神を引き継ぎ、現在では多くの福祉施設で飲食店や福祉施設で作った商品を販売するお店が営まれています。

このたび京都府社会福祉協議会では、トップツアー（株）、（社）京都ボランティア協会との共同企画により、「古都・京都 福祉史跡・事跡をめぐる旅」をはじめました。福祉活動に携わっておられる民生児童委員や福祉委員の皆様、福祉施設や社会福祉協議会の皆様の視察旅行に最適です。皆様方のご参加をお待ちしています。

このツアーはフリープランです。お好みにあわせて福祉史跡・事跡、福祉施設が運営する飲食店、ほっとはあと製品販売店を組み合わせて、オリジナルのコースを作成します。

京都市近辺の福祉史跡・事跡（一例）

●護王神社

護王神社の祭神広虫は、何回となく孤児の救済にあたり、わが国児童養護事業の最初であると言われている。

●六角堂

勧進僧 願阿弥は、天災や一揆などによる難民に粟粥をふるまった。



●京都府盲啞院跡

日本初の障害児教育・盲聾学校



●清水寺

住職大西良慶は、京都最初の養老施設・京都養老院（現同和園）を創設。その他、関東大震災の罹災者救援の義援金募集や罹災少年の引き取りを行う。

●大報恩寺（千本釈迦堂）

住職・方面委員で身体に障害のあった菊入頓如師が西陣隣保館の原型をつくる。

福祉施設が運営する飲食店

ジョイント・ほっと
ふれあいカフェきらきら
蒸しまん&カフェ “まんまん堂”
カフェ トライアングル
ゆいまるレストラン
お山のレストランパズル
レストラン思風都
マドリッド・カフェ
喫茶リップル
喫茶「ほっとはあと」
ハイ・どうぞ
Cafe Canvas

ほっとはあと製品販売店

（ほっとはあと製品とは、京都府内の障害者福祉施設で作られた製品です。）

飛鳥井ワークセンターHOLYLAND
ハートプラザKYOTO
ぶらり嵐山

詳細は、

京都府社会福祉協議会「きょうと福祉パートナー事業」のホームページ (<http://www.f-partner.jp/>) をご覧下さい。

京都ジョブパーク「福祉人材カフェ」開設



■場所■
 京都市南区東九条下殿田町70
 京都テルサ西館3階
 「京都ジョブパーク」内
■利用時間■
 月～土 9:00～17:00 (1名約50分、予約制)
 お問合せ先 (相談予約)
 TEL 075-682-8930
 FAX 075-682-8931

京都府社協では、本年5月18日(月)、新たに福祉人材に関する常設の専門相談コーナー「福祉人材カフェ」を京都ジョブパーク内に開設しました。

京都ジョブパークは、相談から就職、職場への定着まで、ワンストップで支援する総合就業支援拠点です。「福祉人材カフェ」では、福祉職の未経験者・無資格者を主たる対象として、2名の専任相談員による就業相談により福祉・介護事業所への就職を支援しています。

開設約2ヶ月を経て(7月30日現在)来所者は延べ252名(うち無職の方190名)、内定者10名の状況です。相談者の中には、昨今の厳しい雇用情勢を反映して、解雇や「派遣切り」にあった方、自営業を廃業した方などもあります。あるいは、すでにヘルパー2級を取得したが就業経験のない方、現に受講中の方、学生の方もいます。

福祉人材カフェは予約制で、ひとりあたり約50分間、専任の相談員が丁寧に相談に応じます。継続相談の場合は、同じ相談員が引き続いて担当します。また、ジョブパーク内の「若年者」「ミドル・シニア」「母子」「女性再就職

など他コーナーの利用者に対する福祉・介護の仕事や資格に関する説明も行っています。

福祉・介護の仕事に興味はあるが迷っている方には、自分の気持ちや能力・適性を見つめ直す「自己理解」からはじめます。また、福祉・介護の仕事を理解すると共に、実際の職場への適性を判断する「福祉職場トライアル」(職場体験)を8月に開始する予定です。

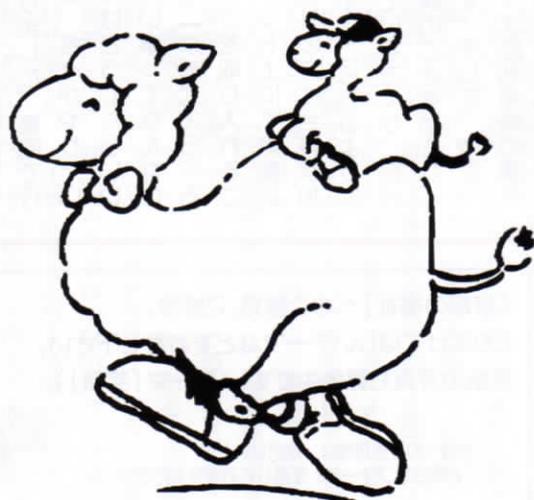
あわせて、7月より毎月2回「福祉・介護の就職セミナー」を開催しています。

(テーマ1)「福祉・介護の仕事って?」

(テーマ2)「福祉・介護 就職活動のポイントを知る」

京都ジョブパークへの来所者は、1日150～200名にもこのぼり、年間約5万人の利用者を見込んでいます。この中から福祉・介護の仕事に志のある方を発掘し、福祉・介護人材の確保に資することが、京都府社協の役割であると考えております。皆様方のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

支える「安心」
 勇気ある一歩を



ボランティア保険

わずかな保険料で、傷害部分(ボランティア自身のケガ)と、賠償責任部分(活動中他人の身体・財物に損害を与えたとき)が補償されます。

保険料一名につき

Aプラン 300円 Bプラン 500円

ボランティア・福祉活動等行事保険

福祉事業総合補償制度

まごころワイド

もあります

問合わせ・申込先

(福) 京都府社会福祉協議会

京都市中京区竹屋町通烏丸東入る清水町375
TEL 075-252-6295

取扱代理店 株式会社エスアールエム
専用ダイヤル 075-822-8613
引受保険会社 三井住友海上火災保険株式会社

夢中!・熱中!ふくしびと

だから続けたい この仕事

福祉の現場で働く人たちの熱い想い・メッセージを伝える新コーナーです。京都府内で“熱い福祉”を“夢中”で実践している方々にスポットをあてて、元気や楽しさ、やりがいを“生”の声でお届けします。

自分が育てられてる毎日

デイサービスセンターやすらぎ スタッフ

唐桑^{からくわ} 佐和子 さん

子育てから手が離れ、景気に左右されず続けられる仕事に就きたいと思い、選んだのが老人福祉施設でした。想像だけで飛び込んだ場所は、体力・気力共に大変な仕事でした。利用者の方の名前・身体状況を覚えるこ

とに毎日は過ぎ、1人になると何をしたらいいのか困り果てたことを覚えていきます。先輩職員に教えてもらうことを必死になってメモをし、介助方法を後ろから盗み見したり、研修に参加することで技術・知識を広げ自分の不安をなくし、利用される方の安心を増や

3年目に今の職場へ移動となり、「在宅での生活を続けたい」という言葉の深さに気付き、介護保険の仕組みを理解していくにつれ、お世話・指導ではなく自身が行う仕事とは何か、利用される方「お客様」について考えるようになりました。集団で行うことを止め、各々がやりたいことをするにはどうしたらいいのか、やりたい事ってなんなのかを探る中で「京都市式えらべるデイ」個別レクを取り入れることにより、ベッソ上にて静養必要とされる以外の方は全員参加

され、目的を持ってデイにこられるようになりました。利用されている方々が、自分の話、家族のこと・趣味のことを話されている笑顔は私の活力です。そして、今思っている事・明日のこと・次回利用時の事を話された時は、心の中はガツッポーズ。目標という《生きる力》を引き出し、添う介護を目指し、《生きる力》に私が育てられている毎日です。




唐桑 佐和子 さん

- 施設名 デイサービスセンターやすらぎ (舞鶴市)
- 職種 介護職
- 経験年数 通算7年4ヶ月
- 好きなことば: 孟母断機
- 熱中していること: 痩せること (実績なし)

京都の福祉 毎月1日発行 昭和36年7月26日 第3種郵便物認可

発行所 京都府社会福祉協議会
発行人 森 育 寿

〒604-0874 京都市中京区竹屋町通烏丸東入る清水町375
TEL 075-252-6291 FAX 075-252-6310
URL <http://www.kyoshakyo.or.jp>

「京都の福祉」へのご意見、ご感想、
とりあげてほしいテーマなどをお寄せ下さい。
表紙の写真も募集中です。(テーマ「笑顔」)

本会へのご意見等は、左記URLの
「お問合せフォーム」を通じてお寄せください。

